大学・附属特別支援学校連携による俳句創作実践プロジェクトへの参与型現職研修に関する研究

―生徒の創作支援における協同体制及び研修成果を中心に―

植山　俊宏・大西　諒子

Research on participatory in-service training in the Haiku Creation Practice Project through collaboration between universities and attached special needs schools
-Focusing on the Cooperative System and Training Results in Student Creative Support-

Toshihiro UEYAMA, Ryoko ONISI

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第５号 （2023年１月）

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.5（January 2023）

大学・附属特別支援学校連携による俳句創作実践プロジェクトへの参与型現職研修に関する研究

―生徒の創作支援における協同体制及び研修成果を中心に―

植山　俊宏、大西　諒子

（京都教育大学・綾部市立何北中学校）

Research on participatory in-service training in the Haiku Creation Practice Project through collaboration between universities and attached special needs schools

―Focusing on the Cooperative System and Training Results in Student Creative Support―＾＾―

Toshihiro UEYAMA・Ryoko ONISI

2023 年 8 月 31 日受理

抄録：知的障碍児教育を担当する特別支援学校における俳句創作実践を行い、知的障碍児の自尊感情・自己肯定感の向上を図った。また大学・附属特別支援学校連携による指導体制の確立にも取り組んだ。さらにこの実践に現職研修生を参画、参与させて現職研修の機会として活用した。これらを研究仮説として実践を進め、成果を検証したところ、いずれの仮説も立証されたことが確認された。

キーワード：知的障碍児、俳句創作、大学・附属学校連携、自尊感情、自己肯定感、臨地的現職研修

Ⅰ．研究の背景・目的・仮説

1.研究の背景

（1）臨床的授業研究及び教員研修の開拓

1）臨床的授業研究の意義―中長期的単元実践による授業研究を中心に―

教科教育の分野で 21 世紀以降、急速に発展してきた研究手法に授業研究がある。20 世紀までは企画、実施について一定の人員と規模、準備を必要としたが、記録機器の進歩や、教育現場の意識改革などにより、通常の実践研究として取り組まれるようになっている。これは単元計画を前提とした一時間（本時）の提案授業で行われることがほとんどである。だが、一定期間、実践現場に赴いて実施する授業研究となると、それほど簡単には進められない。例えば、単元全体を授業研究として公開・提案するケース、数ヶ月にわたって継続的に取り組み、公開・提案するケースなどである。当然ながら、企画、準備には膨大な作業と労力が必要となる。とはいえ、学習者の学力や意識の形成を中長期的にとらえ、その成果について検証を行おうとするならば、このような手法をとらざるを得ない。1）

特に特別支援学校の場合は、一時間の授業研究では、学習者の「伸び」や「心の動き」は見えにくい。一定期間の継続した授業が必要となる。学習者の実態が可視的になりにくいこと、学習者の志向の把握に中長期の観察と活動への参与が必要なことなどの理由によると考えられる。

また、これまでカリキュラムに組み込まれてこなかった単元を計画し、実践する場合、通常は当該校の教員による新規の学力研究、教材研究が必要となるが、実践現場の現実条件により改革的な実践は難しいことが想定される。これに対して、研究機関との連携によりこれが可能になることが考えられる。大学等の専門研究者との連携研究の形で単元を実施するのである。ただし、これも時間的な条件が厳しく、近隣に研究機関が存在すること、担当する研究者が一定の時間を確保し、実践を行うことなどの条件が満たされなければならない。この中長期の臨床的授業研究は、種々の厳しい条件が想定されるが、実現すると大きな研究成果につながると想定できる。2)

2）協同体制による実践を通した参与型現職研修（教員研修）

近年、教職キャリア形成の重点化により、教員研修がとみに重点化されるようになってきた。具体的には、1991 年に法制化された初任期研修が本格化されたことと軌を一にして、日本教師教育学会が発足したことで、学術研究と教育行政が同時に盛行を見ることになった。本年でほぼ 30 年を閲しようとしている。

一般的には、「徒弟制」と称される教育現場の経験的遺産の継承が教員研修の主流を占めてきたが、もう一つの潮流として、集中的、重点的な教員研修も積極的に企画され、実施されるようになっている。前者は、教育そのものと一体化したものとして「研修」という用語は用いられず、教員の実践力形成の活動ととらえられてきた。授業力や学級経営力の向上の取組などが好例である。後者は、一定の企画性を持つものとして研修の名が課され、一般的に教員研修とされてきた。この両者は、OJT と OFF-JT という形態の相違から対置的な方法として捉えられてきた。しかし、21 世紀以降の授業研究の浸透と相まって、臨床的な教員研修として提案授業、授業参与の研究方法も盛んになってきている。焦点化児童（生徒）という重点的な研究対象を措定し、参与観察者による分析を総合して授業の質を検討する方法や複数教員の共同指導によって質を担保する方法も現れている。

医学分野のカンファレンスのように、実践と授業研究を一体化させた取り組みに現職研修の目的を反映させることの効果は大きいと考えられる。毎時間の実践ごとに参与するとともに、授業後一定の省察の場面を設けて成果と課題を把握し、検討することで大きな研修成果を上げることが期待できる。

（2）特別支援学校生徒のことばの獲得

知的障碍のある特別支援学校の生徒はどのようにことばを獲得していくのかについては、さまざまな研究が行われ、多くの成果が報告されている。カリキュラムにおいても、ことばの獲得は最優先に近い位置が与えられ、継続的に取り組まれている。これは言語機能のうち、主にコミュニケーション機能を担う能力の育成として、生活単元、作業単元の中に組み込まれ、生活能力の一部として育成されることが多い。これに対して、有力な言語機能である自己表出機能は、授業時間の制約がある以上、優先順位的にどうしてもコミュニケーション機能の次に置かれることになってしまう。この問題の解決が求められる現状にある。

近年注目を集めている非認知能力とことばの獲得との関係を検討する。次の事例は、ことばの獲得と自己肯定感・自尊感情との関係が如実に現れた事例である。これは、『子どもとことば』（岡本夏木）の末尾に記されている。長い引用になるが、重要な事例なので、該当箇所の全文を引用する。3)

ことばの共有

四年間、私は養護学校につとめたことがある。その在任中の最後の卒業式のことである。

小学部、中学部、高等部の各卒業生はひとりひとり登壇して卒業証書を受け取る。名前を呼ばれ、返事をして進み出、左右に頭を下げ、壇上に登り校長に一礼して、頭を垂れたまま証書が読まれるのを聞く。両手で受け取り、一礼して壇を降り、ふたたび左右に頭を下げ、席にもどる。人びとの見守るなか、これはかれらにとってかなりむずかしい。また子どもによっては身体的にも苦しい一連の行動である。

しかしそれをやり遂げることは、ひとりひとりの子どもにとって、まさに自己の成長を確認する「精神の儀式」なのである。今日の学校で、一般に卒業式はほとんど形骸化し、子ども自身なんの感銘をももよおさぬ行事になり下がっているなかにあって、障害児にとって、その父兄にとって、また、それを見守ってきた教師にとって、卒業式は喜びと、新たな未来への不安を一つにこめた祈りの場なのである。

式場にしつらえられた体育館の冷えこみと緊張に、子どもたちは顔をこわばらせながらも、ビバルディの「四季」の流れるなかをひとりひとり壇に上がってきた。私は証書を読みあげて渡すとき、「おめでとう」といいながら、かれらの手を握った。なかには「ありがとうございます」と声をはり上げる子もあった。

そうしたなかで、中学部の卒業生のなかに、登壇があやぶまれる生徒のひとりがあった。自閉的傾向が強く、三年前の小学部の卒業式では登壇せず、私がフロアーへ降りて証書を渡した子だった。しかし、彼はいま、ひとりで壇を上がってきた。私はやや声を早めて証書を読みはじめたが、その間、彼は何かひとりごとを盛んにつぶやくようであった。彼は日頃から反響語やひとりごとをくり返す癖があった。しかし、やがて、いま彼がつぶやいているのが「どうもない、どうもない」というくり返しであることが私に聞こえてきた。

身を洗われるような感じが私を走った。その子は、集団行動に加わるのを恐れるときや、プールに入ることができないとき、先生や友だちからはたえず「どうもない、どうもない、やれ、がんばれ」と事あるごとにはげましつづけられてきたのである。おそらく「どうもない」という語は彼がもっとも多く周囲から投げかけられてきたことばであろう。前日までの卒業式の練習でも、登壇をひるむ彼を、先生たちは「どうもない、どうもない、上がれ」と叱咤激励してきたのである。

そのかれが、今、私の前で日頃皆から言われてきたことばを、自分で用い、自分で自分をはげましながら、必死に不安にたえようとしているのであった。それはもはやたんなる反響語ではない。外から人によって与えられてきたことばを、わがものとして、自分を支える契機としていま使っているのである。ことばの獲得とは、まさにこういう過程をいうのであろう。

私は気づいた。そのことばはまた、自分も幼い日々、先生や親たちから、たえずかけられてきたことばであったことを。

さらに思った。自分もまた、これからは苦しいときや恐ろしいとき、「どうもない、どうもない」ということばを使うことによって、自分を勇気づけていきたいと。

私たちが語りかけることばを、子どもがわがものとし、かれらがそれをつぶやくようになる。そして私たちがその彼らのつぶやきをあらたにわがことばとしてつぶやきなおしてみる。そこに相互の深い理解が生まれ、ことばは真に私たちの共有するものとなるのではなかろうか。

このように知的障碍児が自らのことばによって自分を支え、自分の行動を可能にしている例を見ると、ことばの獲得と非認知能力との関係を探究する意味が見えてくる。この事例は、言語機能のうち、コミュニケーション機能を反映したものである。もう一つの自己表出機能と非認知能力を考察するとさらに大きな世界が見えてくることが容易に想像される。

現実問題として、知的障碍児は一般に長文の表現が困難である。ことばによる自己表出が可能といっても、一定の分量で自己を表出することが難しいとすれば、別の方法を考案する必要がある。日本の文学の一大特長である短詩形文学、それも最短の俳句を用いることにより、広く自己表出が可能になるとの仮説が成り立つと想定される。知的障碍児が抵抗少なく取り組み、一定の成果が見込まれる俳句創作の方法を考案することが求められる。

先行事例としては、次の兵庫県立氷上特別支援学校の俳句創作の事例が挙げられる。丹波市主催の「たんば青

春俳句祭」に入選した作品である。いずれも高等部所属である。原作品は、縦書きである。

・2018年度入選作品　4）

①姉と行くデカンショ花火来年も　　一年　西本　雅

②なつやすみゆずのチケットにぎりしめ　　一年　寺田　優香

③冷饂飩氷で冷やしてつるつると　　二年　神澤　恵

・2019年度優秀作品　5）

④いねの中バス停への道そこにある　　三年　吉村　祥太郎

・2019年度入選作品　5）

⑤タオルふりおどりくるったなつフェスだ　　一年　藤本　彩花

・2020年度優秀作品　6）

⑥ハサミの音祖母の早技きゅうりもぐ　　一年　堂岡　颯

これらの作品を分析すると、大半がいわゆる一人称視点の作品として成立しているが、中には④のように三人称的な視点を使用している句もある。また、俳句の技法として②のような述部を省略している句、⑤の「おどりくるった」、⑥の「祖母の早技」のような誇張表現、①のような倒置法など、俳句表現として秀逸な句も見受けられる。これらの完成度からして、作者の自己表出の満足感、達成感は十分想像できる。となると、ほぼ必然の流れとして、自尊感情、自己肯定感の大きな向上も推測できる。

2. 研究の目的と仮説

この俳句創作実践は、実践研究として主に三つの目的を持っている。それぞれが前提となる仮説を有する。

①知的障碍児の言語による自己表出機能の向上のための俳句創作実践

俳句という平易な短詩形文学の創作活動により、知的障碍児の言語による自己表出機能が向上するという仮説に立って、入念な準備と計画で実践を行うことで、一定の成果が得られると見込まれる。その実践的原理を分析、検証し、仮説を立証する。

②大学・附属特別支援学校連携の俳句創作実践

本実践は、2022年2月に発想についての意見交流を行ったところからスタートし、2022年度に向けて京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト申請として「特別支援学校の課外活動に期待される教育効果の検討―大学・附属特別支援学校共同での部活動新設を通して―」案を作成、提出し、年度早々採択され、実践が開始された。運動部、文化部の2部が創設され、「俳句の時間」は文化部に「美術の時間」とともに組み込まれ、5月から活動が始まった。実践研究として、「教育効果」の向上を仮説に設定し、年間を通して、大学・附属の連携により実践することで、俳句創作力及び自己表出力が向上し、自尊感情、自己肯定感が向上する成果が得られると見込まれる。その実践的原理を分析、検証することで「教育効果」に関する仮説を立証する。

③参与型現職研修

この俳句創作実践に京都府派遣長期現職研修生を参画させ、授業準備、授業実践、事後検討にかかわらせる協同体制を組織することで、高い現職研修の成果が得られるという仮説に立ち、現職研修生にすべての実践に参与させることにした。この実践を協同で分析することでよって、現職研修の高い効果を検証し、仮説を立証する。

Ⅱ．授業の実際とその考察

2. 第一回

(1) 授業の実際

参加者 10 名。写真や動画を織り交ぜた計 12 枚のスライドを使用して、俳句の約束事・創作の方法を実例の解説と共に説明した。

(2) 事後の検討

写真や動画を見てはいたが、興味が続かず、お喋りや姿勢の崩れが目立った。教員の問いかけに反応を示したのは一名だけであった。この反応を受け、今後の活動の流れを次のように設定した。

・前時に創作した俳句に一言評価と写真を添えてまとめた句集を配布する。
・写真を用いたクイズ方式でテーマ（季語）を発表する。
・題材（季語）の実物を目の前に提示し、触れさせる。
・題材に関わる写真が印刷されたワークシートを用いて創作活動を行う。
・本時に創作した俳句を作者の名前と共に教員が読み上げる。



(3) 教員研修の見地から

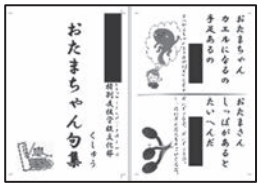
文章を用いた理論からの導入が不適であることと、写真や動画であっても情報過多では興味の喪失につながることが判明した。また、指導する際のコミュニケーション（距離感）において、各生徒の特性把握の必要性を強く感じた。

3. 第二回「おたまじゃくし」

(1) 授業の実際

1) ねらいと準備

題材（季語）を身近に感じられるよう、学校の池のおたまじゃくしを水槽に入れ、目の前に提示した。実物を見せながら、成長すると蛙になるが今は手足が無いことを確認し、「おたまさん/くん/ちゃん」と呼びかけて話しかける方法で創作することを提案した。



2) 作品（7 作品/7 名創作/10 名参加）

①おたまくんカエルになるのこわくない
②おたまちゃんカエルになるの手足あるの
③おたまちゃんポッキーひじきだよおいしそう

(2) 事後の検討

題材に対しては触る、泳ぎを観察するなど興味を持っている姿が見られた。創作活動では、教員や他の生徒が発した言葉を書き並べる行動が顕著に見られた。その結果、題材に沿ってはいるが音数の大半が同じ俳句や意味が不明瞭な俳句が並んだ。

(3) 教員研修の見地から

実物提示の絶大な効果が見て取れ、興味が創作する意欲に直結することを実感させられた。しかし、意欲だけでは完成させられず、不安感を露わにする姿も見られたため、丁寧な手立てと説明が鍵だと感じた。

4. 第三回「きゅうり」

(1) 授業の実際

1) ねらいと準備

俳句の意味の明瞭化を図るため、形や大きさが異なるきゅうりを手にとらせ、触れた感想を書いたり家族に見立てたりする方法で創作させた。

2) 作品（11 作品/9 名創作/12 名参加）

④きゅうりはトゲがおおいしぶつぶつだ
⑤かさみたいきゅうりみているはらへった
⑥きゅうり家のお母さんがとてもおいしそう



(2) 事後の検討

「ぶつぶつしている」「かさの持つところみたい」など気付きの発言が活発にあり、自分だけの言葉を使用することができた。今回が初参加の生徒（3 名）も句集を見て、自分の名前も載せたいと意欲的に取り組む

姿が見られた。

(3) 教員研修の見地から

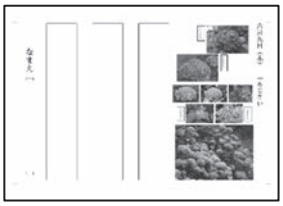
前回の何をどうしたら良いか黙って悩む雰囲気はなく、「先生、○○してます」と教員に話しかけ、「よく気付いたね」と返されると得意げに頷き、「そのまま書いていいですか」と続けて質問をした。手立てと声掛けの影響の大きさが感じられる出来事だった。

5. 第四回「あじさい」

(1) 授業の実際

1) ねらいと準備

前回と同様に多くの気付きが生まれるように、形や大きさに加え、色や種類も多数あるあじさいを題材として提示した。また、切り花、鉢植え、写真など様々な形のものを準備した。



2) 作品（9 作品/7 名創作/9 名参加）

⑦あじさいは色も形もちがうよね

⑧あじさいはきれいな花だねすてきだね

⑨かわいいあじさい色あざやかできれいだな

(2) 事後の検討

誰一人として題材に近づくことも触れることもなく、前回までと比較して興味が薄いように感じられた。作品も見た目に着目したものばかりで、バリエーションに欠けていた。しかし、自分の作品が読み上げられると嬉しそうな表情で、ちらちらと周りの反応を伺う様子が見られた。

(3) 教員研修の見地から

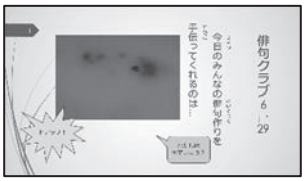
題材を知ってはいるものの、花・きれいという情報しかないことが興味の薄さにつながったと考える。しかし、句集に載せたい気持ちがあるために何とか創作した様子である。その気持ちに寄り添うために、題材選びが大きなポイントであることを実感した。

6. 第五回「バナナ」

(1) 授業の実際

1) ねらいと準備

見た目だけでなく、味も知っているであろうバナナを題材として提示し、大きさや色が異なるバナナを実際に手にとらせ、別のものに見立てる方法も紹介して創作させた。



2) 作品（13 作品/8 名創作/10 名参加）

⑩テンテンがチーターのようだバナナくん

⑪チョコバナナおまつりで見るおいしいバナナ

⑫バナナだよバナナのかわがすべられた

(2) 事後の検討

バナナを食べ物として見た生徒、皮に着目して足を滑らせるものと捉えた生徒、別のものに見立てた生徒とバリエーション豊かな作品が並んだ。創作後に「どうですか」と評価を求める声も多くあり、自分で拍手をする様子も見られた。

(3) 教員研修の見地から

テーマの事物に対する情報が生徒たち自身の経験や知識の中に多数存在することが創作の意欲、作品の質につながることを実感した。また、生徒たちも作品の質の向上を実感しているように思われた。

7. 第六回「たなばた」

(1) 授業の実際

1) ねらいと準備

七夕の前日であったため、笹飾りを提示して短冊を書くという場面を設定した。最初の 5 音を指定して、続く 12 音でお願い事（自分の思い）を書くよう説明して創作させた。



2) 作品（16 作品/9 名創作/11 名参加）

⑬たなばたやたなばたの絵かきたいな早く流れ星にあいたい

⑭たなばたやすべり台みたいです天の川くん
⑮たなばたやミルキーウェイだキュアミルキー

(2) 事後の検討

お願い事と表現したため、文章（音数の無視）が多数見られた。また、とにかくたくさんお願い事をしたい生徒と、今までの創作方法にこだわって自分の思いがかけない生徒が見られた。しかし、今まで見られなかったフィクションの入った作品が現れ、事実でなくても良いという説明につなげることができた。

(3) 教員研修の見地から

創作のポイントとして言われるちょっと「大げさに」「気取って」「嘘をついて」も良いということを、頭で考えるよりも題材に沿って書いたら自然とできていたように、生徒たちには創作してみて納得させる方が良いことが分かった。

8. 第七回「スイカ」

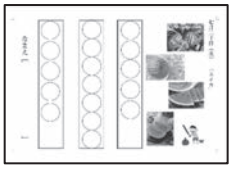
(1) 授業の実際

1) ねらいと準備

ここまでの活動から食べ物を題材にすると意欲的であることが判明しているため、約束事と創作方法を再確認してよりよい創作につながるようにスイカを題材として提示した。また、苗の状態、黄色いものなど身近ではない状態も紹介した。

2) 作品（15 作品/8 名創作/9 名参加）





⑯すいかはねボーリングのボールみたいです
⑰スイカニャンかまど炭二郎似ているね
⑱すいかわりいっしょにたべるおいしいな

(2) 事後の検討

作品数も多く、色、形、味、見た目など多面的・多角的に見た作品が出来上がった。ただ、たなばた句集にキャラクターが掲載されたのを見て、自分の知っているキャラクターをアピールしたくて無理やり使用する生徒が数人現れた。

(3) 教員研修の見地から

食べ物は五感で知っていることが多いため、多面的・多角的な視点で捉えやすいことが判明した。これまでは書けなくて周囲を気にする姿が見られたが、今回は自分がいかに知っているか、もっと書けると周囲を気にする姿が見られ、自信の表れを感じた。

9. 第八回「夏休み」

(1) 授業の実際

1) ねらいと準備

初めて目に見えないものを題材に設定し、これから楽しみなことやしたいことを書くように提案した。同様の方法で創作した第六回で音数の無視が多く見られたため、ワークシートを十七音の枠にして配布した。

2) 作品（14 作品/9 名創作/10 名参加）



⑲しかになるかわとかおよぐなつやすみ
⑳なつやすみデイで水あそびしたいなあ
㉑たんじろうかっこいいですねねずこさま

(2) 事後の検討

楽しみなことが多数あるため意欲的ではあるが、テンションが上がりあれもこれもと会話している間に夏休みという季語がないものが出来上がっていた。また枠を設けたため長い文章は無くなったが、漢字で記入した生徒の音数が合わなくなっていた。

(3) 教員研修の見地から

興味から意欲を湧かせることと意欲を維持したまま約束事を守らせる折り合いのつけ方に課題を感じた。また、ワークシートの工夫にも課題を感じさせられた。

10. 第九回「ひまわり」

（1）授業の実際

1）ねらいと準備

題材そのものだけでなく、題材に関わるものにも着目できるように、タネやタネを餌とするハムスター、名前の由来である太陽を紹介した。創作前にはワークシートに自分で音数を数字で記入する指導を行った。

2）作品（13 作品/6 名創作/7 名参加）



㉒ひまわりは夏で絵をかこ大きいな

㉓ひまわりはタネのもようが黙示録

㉔ちびまるちゃんはひまわりいろをかぶってる

（2）事後の検討

落ち着いた雰囲気で活動を始めることができたため、導入の話をしっかりと聞いており、作品の中にタネやハムスター、太陽を指す言葉が多く見られた。ワークシートに記入する際には、指折数える姿も見られた。

（3）教員研修の見地から

気持ちの切り替えに環境整備は必須であることを実感した。落ち着いた雰囲気があると、提案を受け入れる余裕も見られた。

11. 第十回「あせ」

（1）授業の実際

1）ねらいと準備

初めて題材に動詞をつなげて創作することに挑戦した。あせを「かく」「ふく」あせが「ひく」「でる」「ながれる」を紹介し、どれかを選んで使用する方法で創作させた。

2）作品（9 作品/4 名創作/5 名参加）



㉕放置したペットボトルは汗をかく

㉖汗ながすはやくかえってすずみたい

㉗きさつたいぜんいつ走って汗をかく

（2）事後の検討

特別支援学校の先生方が居ない活動であったが、意欲的に創作活動を行った。一度書き上げた作品を消して音数を合わせようとする姿が見られた。完成した作品の説明しようとする姿も見られた。

（3）教員研修の見地から

第一回から比べると生徒たちが教員に対しても創作活動に対しても安心感を持って取り組んでいることを実感した。そして、その安心感が作品の質に大きく関わっていた。また、創作に慣れてくると自然と推敲のような取り組みが生まれること、動詞を使用することで作品が具体的になり、作者も読者も分かりやすいものになることが見て取れた。今後は、形容詞や形容動詞の使用を促すことや推敲時間の確保、ペア活動も手立ての一つとして挙げられるだろう。

12. 成果と課題

臨地研修に参与することで多くの発見があった。

１つ目は、「コミュニケーション」に関することだ。コミュニケーションは生徒との関係や部活動を円滑に進めるためだけのものではなく、生徒たちに活動に対する安心感を与えるものであり、それが創作への意欲や質の向上につながっていた。また、生徒たちは主体的に考え行動するきっかけを待っている。ただ、そのきっかけは一人一人異なるので、コミュニケーションを通して、探っていく必要があった。

２つ目は、「手立て」に関することだ。題材の選択から、教室の準備、導入やワークシートへの仕掛け、活動中の声掛け、達成感を感じられる場の設定などどれ一つとってもおろそかにすることはできないし、生徒たちのために工夫できることがあった。

３つ目は、「分析をする」ことだ。１回の活動毎に分析を行い、改善し、生徒たちの活動をよりよいものにしようとしてきた。実際、成長が見られる回、これではだめなのかと痛感させられる回があり、様々なことを学んだ。

そして、これらのことは、今回の実践においてだけではなく、どの学校でどのような授業を行うにあたっても、重要なことであった。考えた「手立て」はどこでどんな生徒に対しても有効な「手立て」である。さらに、今後は必要の支援をしないようにすることや時間や気持ちにゆとりを持つことにも配慮しながら実践を積み重ねていくことが肝要である。

Ⅲ.成果と課題

1.仮説の検証

研究の当初に設定した仮説を検証する。

①知的障碍児の言語による自己表出機能の向上のための俳句創作実践

本実践における俳句創作の意欲と作品の質を見ると、明らかに意欲は向上していること、作品の質も向上していることが見て取れた。また、俳句創作として対象に関わって自己の内面を表出できるようになっていることも確認できた。一つにフィクションを奨励したことで現実には存在しない虚構世界を創出することに成功したという自覚と自信が得られたことが大きな成果として指摘できる。また他者の作品に対して徐々に興味を持ち始め、それぞれの世界を尊重する姿勢も生まれてきたことも成果といえる。俳句創作による自尊感情、自己肯定感が明らかに増していることが認められた。これらの成果から十分に仮説の成立は立証できたと考えられる。

②大学・附属特別支援学校連携の俳句創作実践

本実践においては、授業の企画、準備は大学側の植山と大西が担当したが、実際の授業における個別指導、相談は附属特別支援学校の教員が行った。ほぼ毎回５名程度の教員がその任に当たった。その連携はかなり順調で、生徒の俳句創作指導とその環境づくりは適切に整合していたといえる。研究機関と教育現場との連携の一つのモデルともいえる域に達していたとみることができよう。

③参与型現職研修

この俳句創作実践に京都府派遣長期現職研修生の大西は、構想、準備、実践のすべてに参画し、実践を成功させた。授業後の検討会では生徒の創作のありようを的確に見取り、さらに積極的な姿勢を持たせるための案を次々と提案した。現職研修の機会として、有機的に機能させ、大きな成果を上げたとみることができる。

2.今後の課題

俳句創作実践は初期段階から中期段階へと入ったところである。まだ生徒が自主的に創作し、鑑賞するレベルまでは達していない。このレベルの向上が第一の課題である。また大学・附属特別支援学校の連携は予想以上の成果をあげてはいるものの、附属学校教員が授業構想、授業展開、授業検討までに参加するまでには至っていない。今後、同校教員の誰でも俳句創作実践が指導できるような力量形成を図っていく必要がある。これが第二の課題である。現職研修の研究として、これも大きな成果を上げている。協同体制の現職研修の方法を汎用化していき、広めていくことが求められる。これが第三の課題である。

3.本稿の分担

植山が、Ⅰ、Ⅲを主に担当し、大西がⅡを担当した。すべてにわたり両者の検討の結果、成稿とした。

＜謝辞＞

本研究をまとめるにあたって、実践についての情報等の使用を許可していただいた京都教育大学附属特別支援学校に感謝申し上げます。

＜追記＞

本研究は、令和 4 年度京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト経費「特別支援学校の課外活動に期待される教育効果の検討―大学・附属特別支援学校共同での部活動新設を通して―」の配分を受け、実施された研究成果の一部分である。

＜引用文献＞

1)山崎準二(2009)「現職教育における授業研究」『日本の授業研究　上巻』日本教育方法学会編/pp.135-145

2)湯浅恭正(2009)「特別支援教育と授業研究」『日本の授業研究　下巻』日本教育方法学会編/pp.165-175

3）岡本夏木(1982)『子どもとことば』岩波書店/pp.194-197

4）(2019)『第 18 回たんば青春俳句祭作品集』丹波市俳句協会・たんば青春俳句祭実行委員会

5）(2020)『第 19 回たんば青春俳句祭作品集』丹波市俳句協会・たんば青春俳句祭実行委員会

6）(2021)『第 20 回たんば青春俳句祭作品集』丹波市俳句協会・たんば青春俳句祭実行委員会

＜参考文献＞

久道佳代子・小谷裕実(2020)「特別支援学校における校内研修の実態と課題」『教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』第 2 号/京都教育大学/pp.59-68

古賀政文(2018)「知的障害児の言語指導一育成を目指す資質・能力を踏まえた知的障害児の国語教育一」『鹿児島国際大学社会福祉学部論集』第 37 集第 1 号/pp.18-30

坪内稔典(1990)『俳句　口誦と片言』五柳書院

坪内稔典(1994)『俳句のユーモア』講談社

新井竹子・木坂涼・山口晃・水内喜久雄(1998)『教室でよみたい俳句・川柳・短歌１２か月』民衆社

坪内稔典・杭迫柏樹(2009)『季語のキブン』二玄社

坪内稔典(2010)『増補坪内稔典の俳句の授業』黎明書房

坪内稔典(2018)『小学生のための俳句入門　君もあなたもハイキング』くもん出版